

ビュルガーのバラード「レノール」仏訳の諸問題

—1830年代から世紀末まで—

小 林 茂

1773年ゲッティンゲンで書かれた一篇のバラード、アウグスト・ビュルガーの「レノール」が、どのようにフランスに導入され、人気を呼んだか。この詩の数多くの翻訳者のなかでも、ジェラルム・ド・ネルヴァルは、いかに特別な関心を示して、1829年から1848年までの間に、韻文散文あわせて8篇の翻訳を發表したか。また、この執着とも言えそうな取り組みは何ゆえであるのか。これらのことについて、これまでに考察してきた⁽¹⁾。

ネルヴァル自身の翻訳あるいは翻案も、変化しつついわば進化したのであったが、また時を同じくして、数多くの翻案／翻訳者によって「レノール」へと書き換えられていった。そこには、いかにして「レノール」の詩を、フランス語の財産として定着させようかという、ある意味で翻訳の成長ともいべきものが認められるようである。

この稿では、既に取り上げた翻案／翻訳⁽²⁾に続いて、19世紀末葉まで繰り返し翻訳發表された「レノール」の實際を展望することとする。

まず、対象となる作品を一覧しておく⁽³⁾。ネルヴァルによる試み⁽⁴⁾は、無論、省いてある。

1830年以降の *Lénore* 作例一覧 【 】内に韻文散文の別を記す。また番号の立体は散文、斜体は韻文。

1. *Lénore*, conte fantastique, traduit et imité [par] Baron Mortemart-Boisse, *La Revue des Deux Mondes*, t. IV(octobre-novembre), 1830. 【散文】
2. [*Lénore*], Poésies de Bürger, [anonyme], *Revue européenne*, t.I, 1831. 【散文】
3. *Lénore*, ballade de Bürger, [par] J. B. G., *Nouvelle Revue germanique, Recueil littéraire et scientifique*, No 29 (mai), 1831. 【散文】
4. [*Lénore*], Poésie allemande, Bürger, [par] Ernest Falconnet, *La France littéraire*, t.V, 1833. 【散文】
5. *Lénore*, ballade de Bürger, traduite de l'allemand, [par] Paul Lehr, Strasbourg, 1834. 【韻文】
6. [*Lénore*], Illustrations des Classiques allemands, par Eugène Neureuther, Paris, 1834. 【散文】
7. [*Lénore*], Bürger, [par] F. Froly, *Revue du Lyonnais*, t.XII, 1840. 【韻文】
8. Bürger, *Lénore*, traduit de l'allemand par M. E. De Labédollière, [La Pléiade], Paris, 1841. 【韻文】
9. [*Lénore*], Ballades et Chants populaires (anciens et modernes) de l'Allemagne, traduction nouvelle par Sebastien Albin (= Madame Cornu), Paris, 1841. 【散文】
10. *Lénore*, ballade de Bürger, traduite de l'allemand par Paul Lehr, seconde édition, entièrement

- refondue, Strasbourg, 1842. 【韻文】
11. [*Lénore*], Fleurs d' l'Outre-Rhin, Chants, ballades et légendes, par F. Delcroix, Paris 1843. 【韻文】
 12. *Lénore*, ballade traduite de l'allemand, de Bürger, [par] Picard, *Revue de Liège*, t.II,1844. 【韻文】
 13. [Ballade, 1773, *Lénore*], Le Cantique des cantiques de Salomon, traduit littéralement de l'hébreu et précédé de considérations sur la poésie biblique..., par Alphonse Darnault, Paris, 1849. 【韻文】
 14. [*Lénore*], Auguste Bürger, [par] Challemel-Lacour, *Revue germanique et française*, t.XXIV, 1862. 【散文】
 15. [*Lénore*], Fleurs des bord du Rhin, par le Chevalier de Chatelain, Londres, 1866. 【韻文】
 16. [*Lénore*], Les Etrangères, Poésies traduites de diverses littératures, par H. - F. Amiel, Paris, 1876. 【韻文】
 17. [*La Lénore* de Bürger mise en rimes françaises], Poésies posthumes, Philothée O'Neddy(= Théophile Dondey), Paris, 1877. 【韻文】
 18. [*Lénore*], Le Chant de la cloche (Schiller) et Lénore (Bürger), traduits en vers équimétriques et équirhythmiques, par Édouard Pesch, Paris, 1891. 【韻文】
 19. [*Lénore*], A M^{elle} J. M., souvenir d'un concours, Deux ballades allemandes, traduites en vers français par G. M., Le Mans, 1896. 【韻文】

*Lénore*を冒頭に置くのは、「レノール」が、当該の書籍もしくは記事の題名である場合。[*Lénore*]を置くのは、表題は別にあつて、「レノール」を題名とした該作品が書籍ないし記事に含まれている場合である。表題はその直後に示してある。中で、1843年刊行のデルクロワ『ラインのかなたの花々一歌、譚詩、伝説』のみは、未見である。デュルスト⁽⁵⁾によって記載する。

ところで、上記19種の仏訳「レノーレ」のなかで、1877年刊行のフィロテ・オネディの例は、それ以外と同断ではない。

この一覧の各作品は、その発表ないし刊行の時期を遠く隔たることなく制作されたと考えてよいはずである。ただ、この「ラ・レノール」⁽⁶⁾のみが、刊行と執筆の時期に大きな隔りがある。刊行は1877年であるが、この「ラ・レノール」を収めるのは『遺作詩集』*Poésies posthumes*である。フィロテ・オネディは筆名で、本名テオフィル・ドンディ Théophile Dondey という(もっとも、このテオフィルも出生記録にはないそうで、自ら名乗ったものらしい。オギュスト = マリ・ドンディ Auguste-Marie Dondey が正真の本名である)。1811年1月生まれ。テオフィル・ゴティエ Théophile Gautier と同い年である。ゴティエ、ネルヴァル、ペトリュス・ボレル、オギュスト・マケ (マケ Maquet もマッキート Mac-keat などとアイルランドかスコットランド風の変名を名乗った) など、《若いフランス》ないし《ブザンゴ》と呼ばれた、1830年に二十歳前後であったロマン派の第二世代というべき一群の若者たちのひとりであった。1833年の詩集

『火と炎』*Feu et flamme* で知られた。1875年の死後、幼時からの親友エルネスト・アヴェ Ernest Havet によって、長大な「前書き」Notice を付して刊行されたのが『遺作詩集』である。「ラ・レノール」はその中に収録されていて、「1929年に書き始められ、12年ないし15年後に再び取り上げられ、完成した」⁽⁷⁾旨が注記されている。また題名として、「ビュルガーのラ・レノール、元新聞記者、D***・ド・S*** 神父による、フランス語韻文」とあって、この記述が1829年から1841年ないし1844年に及ぶ、どの時期に付されたかは明らかでないが、「若いフランス」の一人らしい、諧謔と韜晦がこめられているようである。

いずれにせよこの作品は、6音綴から12音綴まで変化する定型性を持たない詩行を、4行から8行まで変化させて詩節として組み立て、これをすべてで36節重ね、かつ五部に分ち、全体で241行という形式を持つ。このことからしてすでに、原詩の形式は尊重していない。

詩集『火と炎』は、1829年から31年にかけて執筆されたと、オネディは書いている⁽⁸⁾から、「ラ・レノール」はこの最初の詩集と同じ時期に書き始められている。これは、オネディも親しかったネルヴァルが、雑誌「プシシェ」に、『ビュルガーに倣って』imitée de Bürger と注記して、同じく自由な翻案韻律詩というべき「レノール」を発表した時期にかさなる。しかも形式的にも、類似している。ネルヴァルも、不均一な（8音綴から12音綴；各節4行、6行、7行、8行）構造を持つ節を組み合わせていた。オネディもネルヴァルも、詩形の点からいえば、バラードの内容をフランス語の韻文として作り変えることに主眼を置いていることになる。ただし、オネディは原詩の内容をより忠実に写している。

詩行の数から見れば、ネルヴァルの105行よりは多く、しかし原詩の256行よりは少ない、ということになるが、分たれた五つの部分は、軍隊の帰還とレノールの嘆き、母の前での神への冒瀆、ウィルヘルムの到着と出発、夜の騎行、墓場、にそれぞれ（章題を持ちはしないが）相当し、原詩の流れをほぼ忠実に辿る。騎行のくだりに擬音は用いられないものの、亡霊の葬列、あるいは処刑台の周辺に漂う影も、再現されている。おおよそ、12音綴 alexandrin の詩行を主として組まれた詩節は、ある種速度のある進行を生み、それ以外の、主に8音綴詩行による節は、対話あるいは緩やかな進行を表わすようである。

最後の3詩節はいずれも、12音綴詩行5 + 6音綴詩行1の6行からなり、騎士の死〔死神〕への変貌、黒馬の深淵への墜落とレノールの喪心、死の舞踏と流神の戒めに続くレノールの救済の予告と、原詩のままの内容を持っている。それでいて、その直前には8音綴10行の節がおかれて、丘の上の墓地への到着が、さながら静かな行いのように描かれて、「広大な墓地の中央の／陰鬱な空地に／夫婦は馬から降りて立つ」*Au centre du grand cimetière, / Dans une lugubre clairière, / Le couple descend de cheval.* と、原詩の、フレネティックな烈しい進行が最後まで持続するのに比して、いささか説明的かつ制動の効きすぎた進行を見せる。

全体としては、原詩の表現をある程度尊重しつつ、しかしあくまでもフランス語の韻律を重視

して再構成しようとする意図が見られるとあっていい。ネルヴァルの1829年版「レノール」が、夜の騎行に主眼を置くために、レノールの澆神を再現せず、それゆえにまた、懲罰も行い得ず、夢の話にせざるを得なかったこととは大きく様相を異にしながらも、それでも、両者には、フランス語の詩法を駆使することによって、原詩の怪奇な幻想をフランス語で成立させようとする意図が、明瞭であるといつてよい。

このことが、オネディとネルヴァルの近い関係にあった故であるのだろうか。いやむしろ、1830年代前後、まさしくロマン主義の熱狂が主導していた時代の、詩法の傾向と考えてよいものであるかも知れない。しかも、《若いフランス》ないし《ブザンゴ》と呼ばれた若者たちはまた、そのような傾向の最も突出した部分であったことも、また間違いのないことである。

もう一つ考えておきたいのは、1829年にはじめられたこの試作が、さらに1840年前後にもう一度、取り上げられたという事柄である。その通りであるのなら、幻想的怪奇にフランス語の形を与えようとする試みが、十年以上にわたって持続したと考えられるわけである。そしていかにも、ネルヴァルの持続した「レノール」移植の試みも、1830年代いっぱいにはわたって繰り返されていた。さらに、その他の人々による試みもまた、1830年から1840年代前半までに、多く集中していることは、1830年以降の作例を示す上記の一覧によって、確認できる。それ以降は、ネルヴァルの1848年の韻文「レノール」とこの後に検討するダルノー Darnault の1849年の、同じく韻文「レノール」の2例のみが1840年代後半にあって、しかもその後1860年代まで、十年以上にわたって「レノール」は姿を見せなくなる。

言い換えるなら、1830年代いっばいが、「レノール」の時代と言つてよいのである。

このことを傍証すべき、興味深い回想が知られている。1822年生まれのマクシム・デュ・カン Maxime Du Camp の回想である。

年少期からの友人フロバールの、1880年5月の死の翌年1881年6月から10月まで、カンは「両世界評論」に『文学的回想』Souvenirs littéraires を連載する。8月1日号に発表された第5章「成人の時」L'Émancipation にそのエピソードは綴られる⁽⁹⁾。

幼年期からの友人、ルイ・ド・コルムナン Louis de Cormenin と二人でマクシムはジュールの「レノール」を真似た詩作品を書きあげ、樅の木陰でお互いに朗読しては、悦に入る。誰か大詩人にこの詩の見事な出来栄であること、自分たちが真正の詩人であることを証言して貰いたいということになって、ミュッセとユゴーに手紙を添えて詩を送った。ミュッセからの返事はすぐには来なかった。丁寧ではあるが冷たい調子のその手紙には、「諸君の詩は若い。おそらく諸君も、若い。諸君の詩は私に良き時代、まだそれほど遠いわけではない、最初の時代を思い起こさせてくれた」とあった。「諸君の詩は若い」とは、「諸君の詩は良くない」という意味であると、良い詩を書きたいのなら、勉強しなくてはならないという意味であると、二人は理解した。

折り返しのように返事をくれたユゴーの文面は、二人を仰天させるほどの讃辭に満ちていた。

それが却って不信を呼んだ。ユゴーは自分たちを馬鹿にしてるんだ、とルイも言う。二人して、ユゴーが絶賛した自分たちの詩を読みなおしてみると、わかった。その詩は情けない代物だった。辛かったが、かえって安心した。そこから得たのは、ひたすら精進せよという教訓だった。

それは二人が18歳の年のことであったという。ならば、1840年のことである。1808年生まれのネルヴァルよりも14歳（1811年生まれのオネディからは11歳）年少のデュ・カンの世代にまで、「レノール」の魅惑は影を落として、彼らは1830年代の「レノーレ」最盛期の影響下にあったということであろう。

その模倣詩がどのようなものであったか、伺い知ることはできないが、ユゴーはドイツ・バラードの直接の影響の下に譚詩群をものしているし、ミュッセはまた、異なる韻律の詩行を組み合わせた幾多の作品を書いていた。どのような傾向の詩の形を、マクシムとルイとが物したのであったか、想像がつくようである。

1830年代から世紀末まで、上に表で示した作例を個別に検討して行くこととする。フィロテ・オネディの作品はすでに見たから、除外する。

作品ごとに、以前の考察において指標としてあげたいいくつかの基準を、簡略に示しておく。

おおよそのことだが、初めは散文作品が多く、次第に韻文が多くなる。またレノールの名前は、もはや変更されることはなくなっているが、ウィルヘルムはなおもギヨームとフランス語化される場合がある。しかも、これは散文の場合に限られている。擬音表現も、全体として、取り入れられる傾向にあるとみてよい。散文作品から確認して行く。

1. Mortemart-Boisse, 1830. 散文；節なし；擬音なし；Wilhelm.

この作品の最大の特徴は、詩として示さず、「幻想小説」conte fantastique と副題を与えていることである。かつてナポレオン軍のドイツ進攻の陣中で作品に触れたものであるらしいモルトマル＝ボワッス男爵は、ホフマンに比すべき幻想小説として捉え、しかも、教化的意図を持って制作されているから、無意味な逸脱に満ちたホフマン作品よりも優れていると評している。表題下に「訳並びに模倣」traduit et imité de Bürger と不思議な注記があるこのテキストは、おおむね原詩に従って《物語》を伝える。とはいえ、途次に現れる葬列や亡霊については、原詩にない解説が、ヴィルヘルムの口からなされることがある。擬音なども相変わらず忌避されているようである。何よりも変更の加えられているのは、最後の部分である。

「おぞましい黒馬が恐ろしい叫びをあげると、大地は揺らぎ口を開いて、地獄の精霊ことごとくがいちどきにその深淵から飛び出してくる... レノールは地獄を垣間見て、生命の碎けるのを感じる... と思う間もなく、掻き抱く悪魔が、地下の住処へと急ぎ下るままに、急ぎ姿を消す！... /この死の場面を蒼白く不確かな月が照らしていた... そして地獄の精霊たちは、劫罰

を受ける魂の数いやますのを見つつ、舞踊するのであった... 死者たちは立ったまま大気の波の中に、脅かすがごとくに木魂する言葉を聞いていた。／《死すべき者よ、わが身に起きる不幸をも、諦念を持って耐え忍べ、決して全能の神をそしることなかれ》。」

教化的意図というのは、懲罰が与えられることを強調することにあるようで、原詩に見られる、レノールへの共感同情は消え失せて、レノーレは、地獄に呑みこまれてしまう。

2. [anonyme], 1831. 散文；節あり；擬音なし；Wilhelm.

散文であるが、32の節に分たれていて、これは原詩の節に対応する。擬音などの効果は用いられていないが、語りの内容は、ほぼそのままに、原詩に追従している。末尾も原詩に変わらない。

3. J. B. G., 1831. 散文；節あり；擬音あり；Wilhelm.

前書きで「ビュルガーのバラード、レノールの忠実にして正確な翻訳」と称するだけあって、これも原詩の詩節をそのまま反映する32節に分節されて、きわめて忠実な翻訳と言える。擬音も、trap, trap, trap や kling, kling, また houche, houche さらに hopp, hopp などが見られ、「黒馬」の意の Rapp はそのまま（擬音に重なる効果を意識してだろうか）記されて脚注でその意味を伝えるなど。原詩への忠実を旨とするところが見られる。

4. Ernest Falconnet, 1833. 散文；節あり；擬音なし；Wilhelm.

この作品も、原詩の詩節を反映する32節に改行され（第21節と第22節が分たれていないが、途中、科白のダッシュで分たれるべきところが、印刷上の誤りで分節されなかったと思える）、おおむね忠実な散文訳。というよりも、これは、1831年の「ヨーロッパ評論」誌 *Revue européenne* 発表の、匿名作品の改稿と考えられる。なお、匿名作品では21節と22節は分たれていた。

冒頭の2節のみを、両者を対比して示しておく。

[anonyme]

En même temps que les premiers feux du soleil Lénore se leva de ses pénibles songes :
« Wilhelm, es-tu parjure ou mort? » Combien encore tarderas-tu? Il était allé avec l'armée du roi Frédéric à la bataille de Prague et n'avait pas écrit s'il était sain et sauf. //

Fatigués d'une longue guerre, le roi et l'impératrice adoucissaient leur orgueil et faisaient enfin la paix; et chaque troupe avec cantiques et chansons, avec tymbales et joyeuse musique, le front ceint de vertes branches, s'en retournait à ses foyers.

Falconnet

Lénore se leva de ses pénibles songes en même temps que les premiers lueurs du soleil.
Wilhelm, es-tu parjure ou mort? Combien de temps encore tarderas-tu? Il était allé avec l'armée du roi Frédéric à la bataille de Prague; il n'avait pas écrit s'il était sain et sauf. //

Lassées^(sic) d'une longue guerre, le roi et l'impératrice adoucissaient leur orgueil, et faisaient enfin la paix, et chaque troupe entonnant cantiques et chansons, avec tymbales et réjouissante

musique, le front ceint de vertes branches, s'en retournait à ses foyers.

明らかに前者に手を加えて後者が成っていることがわかる。翻訳を練り上げる試みは、ネルヴァルだけのものではなかったのである。

6. Eugène Neureuther, 1834. 散文；節あり；擬音あり；Guillaume.

Illustrations des Classiques allemands par Eugène Neureuther 『ドイツ古典挿絵集 ノイロイター著』と表題されるこの一冊は、特異なものである。前書きによれば、ドイツの版画家ノイロイターの制作刊行した作品⁽¹⁰⁾をフランスの読者に紹介するものである。20ページ足らずのこの小冊子には、「レノール」、「魔法使いの弟子」(ゲーテ)、「降誕祭前夜の母」(Hébel 作としてあるが、これは Hebbel の誤りなのだろうか)の三作が、集められている。これ以外に、フランス国内でこの版画家作品の刊行物は確認されない。オイゲン・ノイロイター(1806 - 1882)はミュンヘンで活動した画家・版画家である。ゲーテのバラード作品への挿絵などをドイツ国内で刊行していた。

「レノール」は巻頭に置かれて、5ページにわたる。各ページは、罫線の枠を持ち、その中に、版画と詩が配されている。第1ページはページ上半分を両腕をあげて嘆くレノールを母が支える姿の背景に、再会を喜ぶ人々の群像が中景におかれ、ページ下段左半分は、戦の平和裡の終結を示すと思われるトロフェが描かれる。残りの、つまりページ全体の四分の一に冒頭の3詩節が埋め込まれている。第2ページ以降も枠の中に挿絵がおかれ、詩節が配される形をとり、最終頁には上部に詩節が示され、最下部に、墓場に倒れ伏すレノールが描かれている。原図が銅板か木版か定かでないが、枠外には、パリで制作された石板画であるとの記載がある。原画にもとづいて、本来ドイツ語の詩行が埋め込まれていたであろう部分にフランス語の詩行を置き換え、パリで石版に仕立てたものであろう。眼目は図版にあるのである。三作品とも、訳者名は記されていない。

「レノール」は全体で32詩節、原詩の展開を忠実に写している。恋人も Wilhelm である。擬音も、すべてではないが再現されている。もっとも、trap, trap が tro, tro となっていたりする。ともあれ、これまでに見てきた散文訳と、基本的に共通する性格を持つものと考えてよいが、ネルヴァルを含めて、既刊の「レノール」散文訳と、同一訳と認めることのできるほどに類似してはいない。もう一人の逸名作者と考えるべきであろう。

9. Sebastien Albin 1841. 散文；節あり；擬音あり；Guillaume.

セバスティアン・アルバンはコルニュ夫人 Madame Cornu であると、パリ国立図書館本の扉に書き込みがある。バルダンスペルジェもこのことに言及している。オルタンス・コルニュ(旧姓ラクロワ)は、文学サロンを開いて知られた。ドイツ語の詩の翻訳出版に際しては、アルバンの筆名を用いたのである。

この翻訳詩集『ドイツのバラードと民謡』は、ドイツの古い民謡と、民謡に想を得た詩人の作品を集めたものと巻頭に記されて、作者不明の民謡、民謡ぶりであるが作者の知られるもの、18

世紀詩人の作、19世紀詩人の作と4部に分ける。総数403の翻訳詩篇を集めて400ページをこえる大冊である。ビュルガーからは6篇が収められ、中に「レノール」がある。

散文で、明瞭に区分された31節。ただしこれは、原詩の28詩節と29詩節にあたる部分が、長い1節に組まれているため、実質的に原詩の進行は忠実に守られている。擬音は、holà, holà; hourral; hé, hé; hou, houのような掛け声は多く用いられながら、ほかには、hop, hop, hopが繰り返してあらわれているにとどまる。

とはいえ、全体はおおむね忠実に、《物語》を伝えている。

小さなことだが、レノールが馬に乗る際に、「美しの恋人は衣の裾をからげ、跳んですばやく馬に乗った」Schön Liebchen schürzte, sprang und schwang / Sich auf das Ross behende. とある部分が「レノールは服を着て、降り立ち、馬に跳び乗る」となっている。「裾をたくしあげる」ことの忌避が、あるいはあるのかもしれない。この時期の「レノール」ではすでに、恋人の名はヴィルヘルムとすることが通例になっている時に、なおギヨーム Guillaume とフランス語化していることと併せて、訳者の、ある種コンフォルミスト的立場を示しているのだろうか⁽¹¹⁾。

14. Challemel-Lacour, 1862. 散文；節あり；擬音あり；Guillaume.

散文訳「レノール」の、確認される限り、最も遅いものである。原詩の詩節に沿った節に分たれ、全体として《物語》は正しく伝えられている。しかし節は全体で31に留まり、原詩の第17節が欠落している。ここは、今夜のうちに千マイル（ドイツマイルは7532メートル）道を行かねばならぬというヴィルヘルムに対して、レノールがそのわけを尋ね、またヴィルヘルムはそれにこたえる節で、中に、der Mond scheint hell. / Wir und die Toten reiten schnell. 「月は明るく輝いている。／われらと死者は速く騎っていくのだ」という、印象的な、一篇の中心的モチーフの現れる節である。承知して削除したとも思われぬ。訳し落としなのではあるまいか。

それ以外には大きな欠点というべきものはないようである。恋人の名はギヨームとフランス語化されているが、初期の移入の試みではそれと並行してみられた、擬音語への忌避はなく、tra, tra; kling, kling; hurr! hurr!; hop, hop, hop また掛け声 holà; hourra が用いられている。

1827年のフロコン Ferdinand Flocon によって先鞭が付けられた「レノール」散文訳は、上記の各例を通じて、おおむね、原詩の物語の内容は、忠実に再現して伝えることが一般化してきている。少なくとも、フランスの文学的習俗に馴染むように大幅に改変し、あるいは表現をフランス語化する要請はすでにほとんど感じられなくなっているようである。

それでは、この時期に次第に増えてくる韻文訳はどのような相貌を示すのか。

8音綴詩行を組み立てて、バラードを構成しようとする試みは、1829年フォンタネイの「レノール」に初めて見られたものであった。ただし1詩節は4行であって、ドイツ・バラードの8行ではなかった。翌年1月のネルヴァルによる最初の《逐語訳》traduction littérale を謳う「レ

ノール」によって初めて、8音綴8行の節をもって原詩の1節にあてる形式が姿を現していた。ネルヴァルに続いたその他の翻訳者たちには、様々な形式が見られる。

5. Paul Lehr, 1834. 韻文；10音綴・8行・32節；押韻；擬音なし；Wilhelm.

10音綴詩行8行からなり、押韻（4行の交差韻×2）した詩節を32節繰り返す。恋人はヴィルヘルムだが、擬音は一切用いられていない。馬に乗るレノールは、「その言うを聞くや、レノールは進み出て／今この時に優しい思いに駆り立てられて／馬の背に軽々と跳び移る」。原文の端的な表現はなく、過剰な措辞が語りを延引する。終段、騎士の死〔死神〕への変容も、「おお、天よ、みそなわせ、さながら霹靂の一撃。／騎士の甲冑は芥と散り落ち／今や頭蓋は虚ろ、心臓は焰と燃える／おぞましい面の、白い骸骨が／片手には運命の砂時計を持ち／もう一方には恐ろしい大鎌に身を固めて／馬上でさらにも歯を噛み鳴らす」と、簡素かつ喚起力のある原文の表現（「見るがよい、今この時に／この恐ろしい奇跡！／騎士のまとった革の胴着も、一片一片と／落ちて行く、腐ったほくちのように。／髪も肉もないしゃれこうべへと／むきだしのしゃれこうべへと頭は変じ／肉体は骸骨へと変じて／砂時計と大鎌を持つ。」）からは遠い。

韻律を整えることを優先しているのか、おどろおどろしさを、説明的に示そうというのか。形の上では原詩に添うと見えて、いまだフランス人向け翻案の域にある言うべきかもしれない。

7. F. Froly, 1840. 韻文；10音綴・8行・32節；押韻；擬音なし；Wilhelm.

フロリイの訳詩も10音綴詩行8行からなる押韻（平韻4行+抱擁韻4行）詩節を32繰り返す。恋人はヴィルヘルムで、擬音は全く採用されない。

騎行へといざなう騎士にレノールは、「何？ 私を連れて行くのですって、先祖のお城まで／こんなに遅いのに… ああ、あなたの望みは聞けないわ」というのだが、むろん原詩では、《城》などは言及されない（原詩「何？ 百マイルも私を連れて行くの？／今日のうちに新婚の褥まで」）。

冒頭、戦の中断も「多くの血潮が大地に流れた！」などと、余計な思い入れが詩行の進行を却って妨げる。いまだロマンスの世界に何処かでとどまっているということか。

8. De Labédollière, 1841. 韻文；律不定・節不定・34節；押韻 擬音あり；Wilhelm.

6音綴から12音綴の詩行によって4行から8行の詩節を構成し、《物語》の進行につれて異なる詩節を用いて展開する、複合的な詩篇構成を持つ。繁雑になるが、モードで示してみよう：

- A：12音綴3行＋8音綴1行の詩節　；　B：12音綴6行の詩節
 C：12音綴7行＋8音綴1行の詩節　；　D：12音綴5行＋8音綴1行の詩節
 E：10音綴8行の詩節　　　　　　　；　F：（12音綴2行＋6音綴1行）×2の詩節

詩節の展開を、〔場面〕（テキストにはない）を仮に示して、以下に示しておく。

〔目覚めと導入〕4×A；〔軍隊の帰還〕1×B；〔ヴィルヘルムの不在〕1×C；〔母と娘；冒瀆の言葉〕8×D；〔騎士の到着と誘い〕6×E；〔出発と騎行；墓場〕14×F＝合計34節

《物語》の内容と進行は原詩に添うている。押韻は詩節の形式によって平坦韻、交差韻、抱擁韻が複合して用いられる。擬音は、trap, trap; king, kling; hop, hop がそれぞれ一度ずつ用いられるが、そのみである。《騎行》の場面の1節を引用しておく。

Oh! comme sous leurs pas s'envolent les vallées, / Et de bois chevelus les montagnes voilées,
/ Et les bourgs et les forts! / « La lune montre au ciel sa figure blêmie, / Hurrah! les morts
vont vite! en as-tu peur, ma mie? / --Non--; laisse en paix les morts!

異なる詩節の使用は、語りのリズムを反映させる意図によるものであることは明らかであるが、またそれゆえに、翻案の範疇において見るべきものであろう。その上で言えば、場面ごとの律動は、巧みに表されているようである。

10. Paul Lehr, 1842. 韻文；10音綴・8行・32節；押韻；擬音なし；Wilhelm.

8年前に発表した訳詩の改稿版。「最初の翻訳には至らない点があったので、困難な作業ではあったが、手を入れた。今日に至って、力は尽きたので、喜んでと言わんよりは、ゲルマンの詩神を愛する人たちが、私たちの努力なりと認めていただけるならと期待して、この第二版を公表する」と前書きに記す。前年刊行の、ド・ラベドリエールによる自由な訳については、「大いなる美を感じるが、作りすぎた優雅さであるようだ…」と評している。

第一版と比べて、部分的な改変以上のものはない。押韻の形も同じである。擬音も使われない。先に引いた二箇所は、僅かに改訂されている：

「その言うを聞くや、レノールは進み出て／今この時に優しい戦きに駆り立てられて／馬の背に軽々と跳び移る」。Un doux penser が un doux frisson に変わっただけのことである。先の「思い」であれ新たな「戦き」であれ、原詩には現れてもいない。

「しかし突如として、天よ、これをなんと言おう？／景色は変わる… おお！なんと恐ろしい奇跡／騎士の外套は裂け／そして、擦り切れた、埃の切片になって落ちる… / ヴィルヘルムは今や恐怖を呼ぶばかり／白い骸骨が馬の上に座している。／脅かす大鎌に身を固め／手には宿命の砂時計を持ち」。原詩の幻視的性格は、せめてもわずかに回復されているだろうか。

11. F. Delcroix, 1843. 韻文；12音綴・5行・節数不詳；押韻；擬音不詳；Wilhelm.

先にも言ったようにこの詩篇は、確認をしていない。パリの国立図書館には存在せず、リールとストラスブールに所在するようであるが、未見である。デュルスト⁽¹²⁾が資料として収録している第1詩節5行を見ることが出来るのみ。アレクサンドラン5行の詩節を重ねると思われ、a,b,b,a,b と韻を踏む如きである。第1節は、原詩第1節の半ばまでを伝えるのみである（その第3行以下：「私のヴィルヘルムの、おお運命よ、私にはわからない！／その死を嘆かなくてはならないのか、その不実をか？／ヴィルヘルム、戻ってくるのに、まだ遅れなくてはならぬのか？」）から、相変わらずの、と言うべきか、この詠嘆過剰は、すでに散文によってであれ韻文によってであれ、原文を尊重する翻訳の現れ始めている時に、いささか時代錯誤の感がある。

12. Picard, 1844. 韻文；10音綴・8行・32節；押韻；擬音なし；Wilhelm.

10行詩行8行の押韻詩節押韻（4行の交差韻×2）を32重ねる点で、レール、フロリイに共通する。ここでも、擬音は使用されない。措辞は、前二者よりは原詩に近く余計な説明的要素は少ないようだが、出発の場面の「か弱い娘は、すべての怖れを振り払い／俊馬の背なに、今し、跳び乗る」、あるいは騎士変容の場面、「恐ろしや！見よ！... そこに霹靂のごとく／突如おぞましい変容が起きる！... /奇怪なる奇跡！... 芥となって落ちるのが見て取れるのは／騎士の輝かしい装束／云々」。「か弱い frêle」、「奇怪なる étrange；輝かしい brillant」、いずれも原詩にはない。思い入れというものか、感情過多は変わらない。そして視覚的再現は切り捨てられる。

13. Alphonse Darnault, 1849. 韻文；自由詩行・8行・32節；押韻せず；擬音あり；Wilhelm.

各節8行の詩節を原詩と同じく32回重ねているが、自由律の詩行によっている。一行の音節数も、詩節の行数も、また脚韻も、定式に従わず、自由な音律に委ねる、いわゆる自由詩 vers libres は象徴詩と共に始まると考えてよいから、これはそれに先行する大胆な試みである。

詩行は最短で4音節（例：Tout est perdu! [strophe 9; ligne 2]）、最長で19音節（Oh! Malheureuse des malheureuses! Infortunée des infortunée! [st.9; l. 8]）の間で変動する。もっとも、騎士の登場あたりからしばらくは、12音綴 alexandrin を主体とした節が続いてもいる。伝統的な律動を主体に組みたてながら、無理に型枠に流し込むまでもないと考えているようである。解説にいう：「しかし今日まで、我が散文、我が韻文は「レノール」の原詩に対抗しようとして果たさなかった。最後にやってきた我々は、われらに先んじた翻訳者たちよりも幸せな結果を得られているだろうか。敢えてそう期待したいところである。われらが読者に提示するのは、俗に言うところの翻訳ではない、原詩の正確な転写 calque である」⁽¹³⁾。自信ありげである。

定型を必須としないことで、原詩の意味・語法を尊重した訳文を作りやすくなる。その上で、必要と可能性によって、律動は適宜に作り出すという姿勢は明らかで、それゆえに、擬音なども取り込まれていて、無理ない翻訳となっているようである。途中の一節を引用しておく。

Comme couraient à droite, comme couraient à gauche / Collines, arbres et broussailles! /
Comme couraient à gauche, et droite et à gauche, / Villages, villes et bourgs! / « As-tu peur, ma mie? la lune brille bien! / » Hourrah! les morts vont vite! / » Ma mie, as-tu peur des morts? / --
Ah! laisse en paix les morts. » [st.20]

15. Chevalier de Chatelain, 1866. 韻文；8音綴・8行・32節；押韻；擬音あり；Wilhelm.

ドイツ詩人の作品103篇を、著者名のアルファベット順に並べた選詩集。「レノール」は、ネルヴァルが3度の韻文訳で作ったと同じ、8音綴8行の詩節を用いて、押韻し（4行の交差韻×2）32節重ねることで、原詩の形になぞらえる。擬音も一定程度には再現されている。ただし、hop, hop は繰り返されているのに対して、husch, husch が psit, psit に置き換えられていたりする。統辞的には、必ずしも原詩に従うのでなく、時にぎこちない節があるように思われる。

Le Roi n'ayant plus la caprice / De faire occire ses sujets, / Avait avec l'Impératrice / Pour en finir, conclu la paix; / Si qu'avec grand bruit chaque armée, / De l'Impératrice et du Roi / Glorieuse, -- mais décimée, / Chacune gagnait son chez soi. [st.2]

16. Amiel, 1876. 韻文；8音綴6音綴交替・8行・32節；押韻；擬音あり；Wilhelm.

18. Pesch, 1891. 韻文；8音綴6音綴交替・8行・32節；押韻；擬音あり；Wilhelm.

間に15年の隔たりはあるが、この2つの翻訳は、同時に見るべきである。同じ原則で組み立てられた訳詩だからである。

ビュルガーの原詩は、8行詩節を32重ねていた。フランス語への韻文訳は、多くがこの形に追随している。ただし、その場合でも、詩行の律は10音綴をとる例（ルール(2)、フロリィ、ピカール）と、8音綴をとる例（ネルヴァル(3)、ド・シャトラン、〔後出〕G. M.）とが拮抗している。少なくとも、8音綴を選ぶ者は、出自は異なるとしても、フランス中世のバラードが、8音綴のとき8行詩節、10音綴のとき10行詩節の形式を多く採ったことを想起していたに違いない。「レノール」原詩も、その第一行から、8音綴の詩行と読めたであろう。

しかし、フランス語とドイツ語では、詩の韻律の構造が異なる。

フランス語は各音節の音価は等しいと捉えるので、律は、音節の数で生まれる。これに対して、ドイツ語は、音節に強弱が定められているから、単語の持つ強勢音節によって律が生じる。この強勢音節（ヘーブング Hebung）の数によって一行の律が定まることになる。この強勢音節の間（隙間）に非強勢音節（ゼンクング Senkung）が配されることになる。また音節の配列には、強勢音節で始まる場合と非強勢音節で始まる場合があって、最も多く見られるのが、非強勢音節＋強勢音節を律の単位として詩行が構成されるもので、これはギリシャ詩法の用語を借りてヤンプス Jambus (iambe) と呼ばれる。

「レノール」の律の構造は、このヤンプスであって、詩行によって4ヘーブングの行と3ヘーブングの行とが組み合わされている。英詩の用語を借りるなら、iambic tetrameter（弱強4歩格）と iambic trimeter（弱強3歩格）が複合して詩節を作っている。「レノール」各節は、いずれも弱強の4歩格＋3歩格＋4歩格＋3歩格＋4歩格＋4歩格＋3歩格＋3歩格の8行によって作られているのである。言うまでもなく、フランス語では、強弱の音節交替はあり得ないので（これを行おうとした試みは16世紀から象徴派にまで及ぶが、ついに失敗に終わっている）、これをそのまま導入することは無意味だとしても、原詩を韻文として訳すにあたって、このことに留意して、フランス語に生かす必要があると考えたのが、アミエルであり、ペッシュであった。

アミエル（あの『日記』のアミエル Amiel(1821 - 81)である）が1876年に刊行した『詩集・異邦の女性たち』Les Etrangères, poésies は、他に類のない翻訳詩集である。表紙に枠を組んで中に、Reproduction exacte / de Rythme originaux. / Pratique et Théorie / Innovation proposée.(原詩のリズムの正確な再現。実用と理論。革新の提案)と記されている。「異邦の女性」とは、異

邦の詩を意味するだろう。同時に、この翻訳が「不実な美女」*Belle infidèle*ではなく、「不実ならざる美女」であること響かせた心算だろう。多数の外国語の詩を、そのオリジナルの音律を生かして訳出したというのである⁽¹⁴⁾。「レノール」はその37番目である。

エドゥワール・ペッシュ *Edouard Pesch* の方は、シラーの「鐘の歌」と「レノール」を収めるだけだが、これも表紙には *Traductions en vers équimétriques et équirhythmiques* (等格等律詩行訳) と謳っている。

いずれもその企図するところは同様に、4歩格の行は8音綴、3歩格の行は6音綴の、それぞれ詩行に訳すというのである。言うまでもなく、この企画には意味がない。強勢音節によって生まれていたリズムは、どのみち伝えようがない。ヘーブングとヘーブングの隙間のゼンゲングはドイツ語では常に1音節のみとは限らないから、各行の音節も8ないし6と決まってははいない。9であり7であることも可能なのだ。それを、機械的に、同じ音価の8及び6音綴に固定して組み立てたところで、原詩に等しい格、等しい律になどなるはずもない。

<p>Amiel :</p> <p>A droite, à gauche, les maisons, Les champs et la bruyère Paraissent fuir, et les grands ponts Sonnent comme un tonnerre. « Aurais-tu peur? Le ciel est clair. « Hurrah! Les morts valent l'éclair. « Crains-tu les morts, ma belle? » -- « Laissons les morts » dit-elle. [st. 20]</p>	<p>Pesch</p> <p>A droite, à gauche, à leurs regards, S'envolaient dans l'espace Champs, landes, prés, châteaux, hangars; Tout pont gronde où Rapp passe... « -- La lune éclaire les halliers... « Hourra! Les morts, quels cavaliers! « Crains-tu les morts, ma mie?... «--- Non; mais n'en parle miel!... [st. 20]</p>
--	--

形こそ整って、しかし妙に舌足らずな感じさせる。描写だけから言うならば、ペッシュの方が原詩を写しているだろうか。民衆的バラードの直截な表現に似げない、無理に作られた措辞、統辞であり、脚韻であると感じられる。

19. G. M., 1896. 韻文：8音綴・8行・32節；押韻；擬音なし；Wilhelm.

19世紀最後の（そして公刊された最後の）仏訳「レノール」であるらしい。

地方都市ル・マンで刊行されたこの一冊は、出版社ではなく印刷所の名があるから、私費出版だろう。『ドイツの2つのバラード』と題して、「レノール」ともう一つ、ツェードリッツ *Zedlitz* (1790 - 1862) の良く知られた「深夜の点呼」だけを収めた小冊子の表紙には、「J. M. 嬢に、ある共同作業の記念に」*A M^{elle} J. M., souvenir d'un concours* とあって、訳者の名も、G. M. と、匿名。

8音綴詩行8行で押韻（4行の交差韻+2行の平坦韻×2；これは原詩の脚韻構造に同じ）する32節。すでに先行訳に見られる形式による。しかし、すでに一部は定着したかと思われる擬音はまったく現れない。《物語》は、曲げることなく伝えられているが、一行ずつ言葉を探しながら

らパズルのように組み立てたかと思われる、原詩に常に従うわけでもない詩行は、流露感に乏しく、硬い。

Dehors! Ecoute! On tape, on tape / On dirait le pas d'un cheval, / Un cliquetis d'armes qu'on frappe! / On s'arrête au seuil virginal! / Ecoute, écoute! / La sonnette / Tremble sous une main discrète. / Une voix au son masculin / Traverse la porte soudain. [st. 13]

これはどう見ても、素人細工である。お嬢さんと二人で作詩練習をした記念の印刷物か。

さて、ここまで見てきた仏訳「レノール」諸篇をどのように捉えるべきか。個々の作例批評にさほど意味はない。世紀の初めから末に至る移入の試みは、何を生み出したのであったか。

文化的後進国であったドイツが、必要に迫られた翻訳作業の中から、19世紀初めには、翻訳理論を構築し始めていたのに対して、フランスは、敢えて言うならば、文化先進国の自負ゆえに、翻訳に関しては、「不実な美女」la belle infidèleの国であった。フランス的 bon sens にそぐわないものは、あえて書き換えて良しとする、実は今なお残存する、フランス語表現優先思想。仏訳「レノール」の歴史は、フランスにおける翻訳意識の伸展の歴史であったと考えることが出来る。始まりは、まさしくフランス化であった。原詩のどれほどが伝えられただろうか。しかし、矛盾したことだが、翻訳への魅惑は、実に「レノール」の非フランス的（あるいはロマン主義的）特質から生まれていた。それだから、積み重ねられた翻訳の試みは、まさしく、フランス的でないものを、そのまま移し伝えることへ向けての試みとなった。

《物語》を伝え、雰囲気を伝え、原詩の言葉づかいを伝えようとする時、散文訳が先行した。その試みによって、とりあえずは、移植の可能性が確かめられた時に、詩の形のままで、これを試みる立場が生まれた。散文訳の一応の完成時期は、1830年代末、そして40年代初めだろう。1840年ネルヴァル訳、1841年アルバン訳の時代。そしてこれはまた、ロマン主義的文学表現の確立して行く時期ではなかったか。韻文による翻訳が集中しているのは、その後の、1840年代いっぱいである。1844年ピカール、1848年ネルヴァル、1849年ダルノーが、ほぼその到達点であった。ロマン派の第2世代の活動の中から、それは生まれた。

ドイツ・バラード「レノール」のフランス移入は、この時期までに、果たされたと考えてよいのだろう。ダルノーによる自由律詩行の使用は、それだからこそ、新しい詩表現への道の気配として、考えられるのである。

この時期までは、次々と追いかけるように現れていた仏訳「レノール」が、突如現れなくなる。1850年代には一篇の「レノール」もない。この作品のフランス語化によってなされようとしていたことはすでに果たされたということだろう。デュ・カンの親友フロベールの幻想的作品が生み出されるのが、この時期である。土壌はすでに用意されていたということである。

そして1860年代には、一篇の散文訳と一篇の韻文訳。散文訳はまずまずの仕上がりにあっても

脱落がある。韻文訳は、30年代の訳詩に新たなものを付け加えることもない。新たなものはもう生まれえない。一応の標準はすでに出来上がっていたのである。

次に新たな翻訳が現れるのは、二つの格律訳韻文。これは明らかに、高踏派から象徴派へと続く時期である。細緻な詩法構築の模索は、時代の雰囲気から発していることに間違いない。

おそらく問題は、個々の訳詩の成就ではない。一つには、翻訳によって、内になかったものを取り入れて自らの文学の富にすることが、この期間に意識されていったのである。

そしてもう一つには、そのためには、翻訳がいかなるものであるべきか、あるいはあり得るかについての考察が、まだ顕在化してはいないとしても、始められたということである。

「レノール」はそうした意識を残して、役割を終えたのである。

言い忘れるところだった。1896年、おそらく文学愛好者による韻文訳詩の試みは、もはや、「レノール」を訳すことが、練習帳の作業にまでなっていたということである。翻訳は、文学の技として、誰でも手に届く、ということは、誰でもが意識する働きに、なっていたということである。

Automne, 2011

注

- (1) 「ビュルガーのバラード「レノール」仏訳の諸問題」、「早稲田大学文学研究科紀要」第49輯・第2分冊、2004年、および、「ビュルガーのバラード「レノール」仏訳の諸問題 ネルヴァルによる8つの versions」、ETUDES FRANÇAISES 早稲田フランス語フランス文学論集、no. 12、2005年、を参照。
- (2) すでに言及した、19世紀初頭1830年代初めまで翻案／翻訳は以下のとおりである。

Léonora, traduction de l'anglais par S. Ad. De la Madelaine, Paris, 1811.

Léonore, poème, imité de l'allemand de Bürger, par Mme Pauline de B**** (= Mme Bradi = Comtesse de Louvorie), Paris, 1814.

Léonora, ballade traduite de l'allemand de Burgher(sic) [par] Edmond Gérard, *Ruche d'Aquitaine*, tome III, 1818; reprise in *Annales de la Littérature et des Arts*, t. XXVII, 1827

Léonore, in *Études Poétiques*, [par] J.-B. Pévrieu, Toulouse, 1827

Léonore, in *Ballades allemandes, tirées de Bürger, Koerner et Rosengarten*, et publiées par Ferdinand Flocon, Paris, 1927

Léonore, imité de Bürger in *Ballades, mélodies et poésies diverses* [par] A. Fontaney, Paris, 1829

なお、このうちで1827年発表のペヴリユの作品は、2004年段階では直接にテキストを確認できていなかった。その後テキストを調べ、その全体を把握することが出来た。

8音綴4行30詩節押韻(抱擁韻)。表紙には、翻訳 traductions と記されているが、すくなくとも「レノール」は単純に行数から言っても、翻訳ではない(原詩が8行32詩節であることはすでに言った)。のみならず、ヴィルヘルム Wilhelm はヘルマン Herman (フランス人ならエルマンと訓んだらろう)に変更されている。オノマトペ表現は完全に排除されている。神への呪詛は維持されるが、母親は現れない。騎道の道すがらに、亡霊が出現することもない。末尾第30節では、「われら死すべき人間の定めとは／神慮の命ずるところに／黙したるままに従うこと／天をそしるなど思いもせず」 Le sort de notre être mortel / Est de se soumettre en silence / Aux ordres de la Providence / Sans oser accuser le ciel. と、教訓は示されて、レ

ノーレの魂は救われることもない。さらに、その直前の節では、「大地は開きその深淵に／夫と妻とは呑みこまれたり／かくて至高の瞋恚はその／生贅をば確保したり」La terre s'ouvre, et dans l'abime / Sont engloutis les deux époux : / Ainsi le céleste courroux. / S'est assuré de sa victime. とあって、騎士は、砂時計と大鎌を両手にした死（死神）に姿を変えることなく、ここでは、当人（ヴィルヘルムであれヘルマンであれ）のまま死者として大地に呑みこまれることになっている。

- (3) フランス語訳「レノール」に関する書誌は、「ビュルガーのバラード「レノール」仏訳の諸問題」、『早稲田大学文学研究科紀要』第49輯・第2分冊、2004年、注(5)参照。
- (4) ネルヴァルによる翻案・翻訳については、「ビュルガーのバラード「レノール」仏訳の諸問題 ネルヴァルによる8つの versions」、ETUDES FRANÇAISE 早稲田フランス語フランス文学論集、no. 12、2005年、に掲載のリスト (p. 95) を参照。
- (5) 上記注(3)参照。D'hurst, Lieven, "Sur la poésie traduite et ses enjeux au XIXe siècle : le dossier des traductions françaises de la «Lénore» de Bürger", *Linguistica antverpensia XXIII*, Universiteit Antwerpen, 1989
- (6) 「ラ・レノール」La Lénore は「レノール嬢」とでも訳しておくべきものである。固有名詞の姓の前に定冠詞付すことは、著名人、ことに歌手・俳優などを讃える（時に逆説的に）意識の表れとして用いられる。ただし、名の前に付すことは、通常は逸脱である。
- (7) *Poésies posthumes*, Philothée O'Neddy, Paris, 1877. P.264
- (8) *Lettre inédite de Philothée O'Neddy, auteur de : Feu et Flamme, sur le groupe littéraire romantique dit des Bousingos*, P. Rouquette, Librairie-Éditeur, 1875. を参照。これは、1862年にジャーナリスト、シャルル・アスリノ Charles Asselineau に宛てて書かれた、弁駁書。
- (9) *Souvenirs littéraires*, La Revue des Deux mondes, L'année, 3e période, livraison de 1er août, p.485. 近年の刊本として、Maxime Du Camp, *Souvenirs littéraires*, Aubier, 1994, p.152. を参照。
- (10) Neureuther, *Bilder um Lieder*. 1818.
- (11) 今回問題にする1830年以降のテキスト全体では、「裾をあげる」を取り入れているのは、4種（3訳者）に留まる。以下の表現である。

Bellement Lénore se retroussa... [anonyme] (= Falconnet), 1831.

Gracieusement la mie se retroussa ... J. B. G., 1831.

Et bravement Lénore retroussa sa robe... Ernest Falconnet, 1833.

La belle releva sa robe... Eugène Neureuther, 1834.

アルバンに近いのが Challemeil-Lacour, 1862の場合である：La petite mit sa belle jupe...

偏らないために言うておくならば、ネルヴァルも、「裾をたくしあげる」ことを言うてはいない。1829年版翻案以外の、散文および韻文のすべてのネルヴァル訳「レノール」で、この箇所は、「レノールは靴を履き」Lénore se chausse... となっている。se retrousser は避けて、なお原詩に見られる [j] の音を生かそうとしたのだろうか。

かくも多くの翻訳者が「裾をからげる」を避けるのは、ことが《フランス的》良俗に反するというのであろう。その一方で、寝床についていたのだから、衣服を身につけ、靴を履かなくてはなるまいと、余計な表現を付け加える。これこそフランスの合理主義の表れというべきか。

- (12) 注(5)参照。
- (13) *op.cit.* p. 95.
- (14) 原詩の言語は、英語、ドイツ語、ハンガリー語、ブルトン語、イタリア語、スウェーデン語、スペイン語、セルビア語、スイス方言、デンマーク語、ポルトガル語、典礼ラテン語、サンスクリット語、近代ギリシャ語から、さらに赤膚族（つまり今ならネイティブ＝アメリカンである）の歌 *Chants de Peaux-Rouge* にまで及ぶ。